

姫路港(姫路市)が今年、開港50周年を迎えた。高度成長期以降、重厚長大産業を支える工業港として発展。エネルギーの一大基地でもある。一方で、臨海部の大半を占める埋め立て地に工場が並

び、市民や観光客を海から遠ざけてきた。港湾管理者の兵庫県や姫路市は50周年を機に、観光・交流拠点としての可能性を模索し始めた。

(姫路支社・片岡達美)

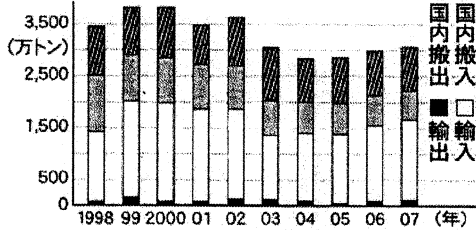
姫路港もつと身近に

姫路港の取扱貨物量(2007年)は3051万トンで、全国の港で32位。半分が輸入で、その8割に当たる1161万トンをエネルギー原料の液化天然ガス(LNG)が占める。大阪ガスの姫路LNG基地には月6~8回、インドネシア、ブルネイなどからタンカーが入港する。

播磨経済に与える影響は大きい。03年の調査では、姫路市内での経済活動を金額に換算すると年間3兆8千億円、このうち港での物流産業や港を巡る製造業などは1兆5千億円に上る。

同市飾磨区妻鹿の出光興産跡地では、パナソニックの子会社の液品パネル工場が10年稼働予定で、新たな雇用創出も期待される。重

姫路港の取扱貨物量の推移



開港50年

重厚長大産業けん引 観光拠点化を模索

県や姫路市 民間に機運 客船誘致や催し展開



外国船クルーズが入港し、姫路港で記念イベントが開かれた(5月14日)

姫路市本場などの一部にしか残っていない。観光地としての集客力は不十分

そこで県は、開港50周年



事業で90以上のイベントを展開し、観光港としての可能性を探る。7、8月には独立行政法人航海訓練所の練習帆船「海王丸」の一般公開なども行う。

民間にも姫路港に期待を寄せる動きが出てきた。7月には、大型客船「ふじ丸」が歴久島に向け出航する。

このプランの中心となった飾磨海運(姫路市)の水田裕一郎社長は「海の玄関口にも注目してほしい。加古川以西には80万~100万人の市場がある。大型客船の定期運航に結び付けた」と意気込む。

5月、姫路市内であった開港50周年記念シンポジウムでは、パナリストからこんな意見も出た。「定期航路の一つ、家島を観光地としてPRするのは三港から北に延びる明治時代の

50周年を機に観光港としての可能性を見いだせるか。姫路港は岐路を迎えている。

姫路港 1951年、旧飾磨、広畑、網干の3港を統合し、59年4月1日、関税法で外国船も寄港できる「開港」に指定。67年には国の特定重要港湾(全国で23港)にもなった。現在は6港区合わせ東西18kmに及ぶ。

中播磨県民局の笹倉雅人局長は「姫路港を使いこなす」という発想で、観光港としての整備がPRが必要と訴える。

一方で、姫路港の観光拠点化に懐疑的な見方もある。流通科大(神戸市)の森隆行教授は「LNGなどの森隆行教授は「LNGなどのエネルギー原料の輸入は今後も増える。工業港としての地盤強化に投資する方が賢明だ」と指摘する。